

郷 土 の か ぜ

仙 台 市 民 図 書 館 郷 土 資 料 コー ナー か ら



九 曜 紋

白 石 伊 達 (刈 田 家)

『 相 阿 彌 流 生 花 百 瓶 圖 全 』 (写 本)

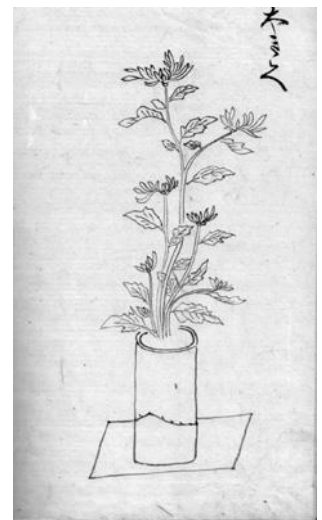
市 民 図 書 館 郷 土 担 当 八 代 右 子

昨年夏の「見る、さわる！古書の世界へご招待」と銘打った展示の準備中、地下書庫で江戸時代の未整理本を見つけました。漢字とくずし字で溢れんばかりの箱の中、心惹かれた一冊の絵図入り和書がこの『相阿彌流生花百瓶圖』です。

相阿彌流は、室町時代に活躍した相阿彌真相を祖とし、「華道を生業とすべからず」の言い伝えを守って五百年以上続く流派です。写本デビューには絶好の書と、素朴な疑問をのんびりと調べ始めたのですが、何しろ素人同然です。奥書の文章も何のことやら、わかるのは「泉坊門人泉柳」「天保九戊戌(1838)」「泉秀丈」くらい。まもなく、『百瓶圖』は元の箱へと密封されました。そして、古美術品サイトの『相阿彌流極秘十瓶圖』の書誌情報に「泉坊法恵」「寛政12年(1800)」「泉詠丈」の文字を見つけた日、ガムテープはまた剥がされたのです。時は僅か38年差、泉柳は法恵の弟子？共通の「泉」を同門の現れとみるのか？「丈」を敬称とみるのか？新たに解読できた「秘書花道」「聊不可有他見者也(いささかも他見すべからずものなり)」の文言にそそられ奮起して調べるも、史実としての確認がとれません。出鱈目に書き付けた眉唾物なのか…。

内容は「活花」と「花器」の二部構成。花器の部には珠光・紹鷗・利休・庸軒・織部・安知の名や寸法の書込み、工具等の図。でも、やはりその「人と型」が現存作品と一致しません。そこで、華道史関連の本を手当たり次第に見ていると、見覚えのある泉坊法恵の「きく」の生花図に目が留まりました。慌てて『百瓶圖』を開くと、ありました、同じ型で活けた「大きく」の図が。文字だけが情報じゃない。こういう見方もありなのかと改めて頁を捲っていくと、今度は右肩に「玉道流百瓶之内抜書」の墨書を発見。何度も見ていてなぜ気付かない…。読めないと思っていると、読めるものも読めなくなるらしい。抜書の図は十点。後から追加して綴じ直したようにも見える。相阿彌流と何か関係があるのだろうか。調べてみても、いけばな専門の辞書にも記載がない。思いつくキーワードも尽き、ネット検索も諦めかけたある日、奇跡的に庄内町資料館の会議録がヒットしました。玉道流は、山形の庄内地方を中心に、各家の長男のみに伝授して二百年以上続いてきた流派でした。時代と共に長男の在り方も変わり、残念ながら、この四～五年の間に、とうとう存続を断念するに至ったそうです。

頁を捲るたびに新しい発見があり、未だに新たな疑問が湧いてきます。ですが、そろそろ下調べを終えて、当館所蔵の資料とすべき頃です。古書整理の技術も学ばなければなりません。まずは、一人ででもできるくずし字の勉強を始める決心をしました。資料を充分読みもせず、すぐ人に聞くとというズボラな調査にご指導くださいました皆様、ありがとうございました。



『相阿彌流生花百瓶圖』 大きく の 図

■ 素晴らしい古書の資料、私もそばで見ているワクワクし通しでした。この調査がこれからどのような変化を見せてくれるのか大変楽しみです。(小石川 記)

「図書館に行く愉しみ」

太白区在住 吉岡 一男

私事で古い話になるが、学生時代には仙台では県図書館しかなく、現在の宮城県庁議会棟におかれていた。戦災で図書館蔵書は烏有（うゆう）に帰したが、郷土資料は疎開で戦火をまぬかれ、この資料に接したのは1953年のことであった。当時の館長であった佐々久氏にお願いして閲覧書写をさせていただいたのが図書館利用の嚆矢（こうし）であった。

このあと勤務先が主として宮城県内の地方都市であって、図書館利用は思うにまかせず仙台勤務は1966年からのことであった。しばらく時間をおいたのち、新設して数年を経た仙台市民図書館を訪れた。西公園の地で戦前は借行社がおかれた地に二階建ての当時とすれば一種の文化殿堂であった。この二階に郷土資料室があり、担当として種部金蔵氏がおられました。当方が持ち込んだ郷土の事象について、丁寧に文献資料や図書一般から調査されてレファレンス（参考文献）作業にあたっていたことが深く脳裏に刻まれている。

図書館は多くの人々の知的要求のための蔵書の充実、ここで閲覧・貸出・返却などの重要な任務があることは承知しており、あえて図書館の資料にある情報を必要とする人を結びつける参考業務が郷土資料室の存在ではなかったのかと思っている。

かつては電子機器もなく、司書の方々が蔵書名や資料名を独自で学ばれ、それをレファレンスサービスされた図書館の存在であった。その典型的存在が種部氏であって、収蔵された図書をくまなく暗記され、どこに排列されていたのかの眼力は驚くべきことで、単に蔵書名を誦（じゆん）じるだけでなく、内容も相当程度理解されていたからこそ、質問者にも100%とはいかないまでも対応できたのではないだろうか。

さらに大事なことを言えば、質問者との間で取りかわした会話であった。十分に相手の要望を聞き、それをノートに書きとどめることを大切にされた。多くの利用者に図書館資料もさることながら、担当者として心のふれあいによって何を求めているかを常に模索しつつ、対応されている姿が今も心の片隅に残っている。

結局、図書館でのレファレンス業務は、図書資料を媒介としながら利用者と担当者の心のふれあいによって成り立っていたことを忘れない。さまざまな利用者の要望に応えるのは容易ではなく、至難の業かもしれない。そこで解決された事項に遭遇したときの喜びは何ものにもかえがたく、図書館に行く愉しみも腹藏されたことと感謝の気持ちが一杯であることを述べたいと思う。

なお、『要説 宮城の郷土史』昭和55年と『同書 続』平成4年に吉岡が質問した事項も掲載されており感謝を申し上げたい。

現在、吉岡様は仙台郷土研究会の会長の要職に当たられております。

■ 編集後記

早いもので今年も残り僅かとなってしまいました。「郷土のかぜ」の発行回数も昨年より減少してしまい、利用者の皆様方には申し訳なく思っています。一番大事なことは「利用者からの声」で、その声の中から取り上げる内容のヒントを得ているといっても過言ではありません。どしどしご意見要望をお願いいたします。それでは良い新年をお迎えください。

小石川 記

発行：仙台市民図書館 郷土資料コーナー (担当：小石川)
〒980-0821 仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL022-261-1585